
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第25号 2018年3月

自然や人間がある土地で生きていることを示すもの

— 地域リサーチを通しての作品制作 —

Artwork that can Portray the Coexistence of Nature and People at a Certain Land

— Creating artwork through regional research —

鴻崎 正武 | KOZAKI Masatake

自然や人間がある土地で生きていることを示すもの

—地域リサーチを通しての作品制作—

Artwork that can Portray the Coexistence of Nature and People at a Certain Land

— Creating artwork through regional research —

鴻崎 正武 | KOZAKI Masatake

What can art accomplish in this day and age? In the land of Tohoku, artwork is being created by reinterpreting the meaning of “place” from phenomenological and archeological approach. A certain spontaneous unique production style guided by the mysterious climate of Yamagata is being established in recent years, and this style is now becoming a collective phenomenon.

In contrast to the bewildering and pleasure-seeking scene of big cities, people living in Yamagata are being taught daily about the meaning and evanescence of individual existence through the season and weather that changes on daily basis. This harsh and magnificent natural environment reminds the locals about human frailty and sheer force of nature in a gentle yet cruel ways. When various human belief systems finally become whole with the nature by going through the circle of life, it is only then that humans can regain the awareness toward life force that they have forgotten. Tohoku is filled with various attractive cultural and nature-oriented experiences that people can only experience by visiting the actual land.

I would like to see artists define what it means to draw a picture, by engaging in various field work and research by focusing on the reality of living in this land on this day and age. In doing so, it is my hope that these artists can untie their creative flow in their production process, by being able to extract commonness and idiosyncrasy specific to a certain “place”, and take the regional art and “site-specific” concept to the next level.

Keywords:

地域、東北、絵画、桃源

regional, Tohoku, painting, TOUGEN

1. はじめに

この現代に芸術が何を成し得るのか。東北に根を降ろし、現象学や考古学的アプローチから「場所」の持つ意味を再解釈し、作品制作をしていく。ここ数年で、山形の風土がもつ神秘性に導かれるように自然発生的な、特殊な制作スタイルが確立し、コレクティブ化してきている。

中央都市の目紛しく享乐的な景観とは対照的に、山形は季節や気候で毎日景色が変わり、日々を過ごす人々に、個の存在や意識の儂さを教えてくれる。厳しく雄大な自然は、為す術もないことや、受け入れるべきことを優しくも残酷に突きつける。自然とともにある信仰も脈々と生まれ死んでいく自然と一体になることで、何か忘れていた生命感覚を取り戻せる。ここ東北の文化や自然は、訪れて体感することでしか知りえない沢山の魅力的な事柄に溢れている。今この土地で生活し、生きることのリアリティを見つめ、様々なフィールドワークや地域リサーチを行いながら絵を描くことの意味を考え、地域アートやサイトスペシフィック¹の次の段階として、「場所」が持つ共通性や特異性を抽出し、作品制作の中で紐解いていきたい。

2. 東北画

チュートリアル「東北画は可能か?」は現在8年目である。教員と学生とが身分関係なく「東北」を旅しながら調査報告し、作品を通して語り合うことで自問自答を繰り返していた。福島出身である自分は、この大学にきてから知った郷土

の様々なコトに触れ、あらためて自身のアイデンティティを探り当てる重要な切掛けとなった。

しかし日常はある日を境に変化し、原発問題や震災で視えてきた東北の問題は、世界や地球規模で深刻な事態となった。実家である福島県双葉町鴻草は原発半径5キロ圏内にあり、家族共々山形に避難を余儀なくされた。

複雑な心境や不安の最中、自分は土地への想いを絵に描いた[図1]。営んでいたコンビニ酒屋やよく海水浴をした近所の郡山海岸、長男として守るべきはずだった墓など、土地の記憶として大事なものを1枚の画面に収め込んだ。この絵は普段の制作とは異なり、自分が今まで描いてきた絵空事では無く、何らかの真実や希望に触れることができた作品になった。



図1 東北画12号 「鴻ノ草」

3. 代官山 Anjin プロジェクト

2011年の震災直後、東京の代官山蔦屋書店Anjinというラウンジスペースの壁画プロジェクトを手がけることとなった。

空間プロデューサー池貝知子氏とクライン・ダイサム・アーキテクトとのイメージ共有をはかりながら、自身のテーマである「TOUGEN=桃源郷」の解釈と、動植物の融合や飛行船などの古今東西のモチーフ、南蛮渡来の島にもたらされる未知なるエネルギーを原動力に発展を遂げた日本や、三浦按針の開拓精神がコンセプトとなった。TOUGENは「森羅万象すべてものが解体され複雑に掛け合わされた、文明と自然が共生する世界」であり、人間の欲望が生

み出した夢の世界でもある。惑星人間や地球と太陽が掛合わさり人間の足が生えてジタバタしているようなモチーフを配し、東北の祈りの文化であるこけしや赤べこなどの民芸品、原子炉などを対比的に散りばめ、8400×2200mmの作品[図2]をわずか2ヶ月の期間で学生スタッフの協力をもとに作り上げていった。



図2 「TOUGEN NO.48-Anjin-」

代官山という場所性をあえて意識したわけではないが、作品のイメージとして、どこか震災直後の不穏さや、都心と地方、東北の震災を含めた地球の様々な問題をこの絵に封じ込めようという想いで制作をした。盛り上げのマチュールは、雲や象形文字、太陽や惑星などの形にし、そのうえから多種類の金属箔(24k、18k、仲色、三歩色、水色、定色、ホワイトゴールド、銀、赤貝、青貝、黒貝など)を施した。この施設は2012年にDesign for Asia賞商業施設部門大賞とWorld Architecture Festival 賞ショッピングセンター部門最優秀賞を受賞、2013年にはWallpaper Design Awards 2013にてBest Bookshopに選ばれている。

4. ひじおりの灯

2012年開催されたひじおりの灯プロジェクト²での灯籠制作では、温泉街をパノラマにし、東北のこけしや地蔵を描いた。大蔵村肘折温泉は開湯1200年のカルデラの窪地にある街で、17箇所の泉源を持ち、冬は日本一の豪雪地帯という神秘的な場所である。自分は招待作家として招かれ、学生達と温泉宿に宿泊しながら、肘折を取材散策し雄大な自然に触れた。雪解け水と桜、新緑や山菜など、様々な四季が同居する幻想的な風景にただただ圧倒された。つ

たや肘折ホテルの柿崎氏の協力により、肘折こけしや沢山の種類のこけしをモチーフに取り入れた。東北地方固有の郷土玩具であるこけしは、技法や形式が何代にも継承され、風土によって異なる顔の表情や模様など独自の特徴がある。こけし王国である東北の素朴な表情や、ふるさとへの想いを灯籠制作に込めた。



図3 「TOUGEN -hijiori-」

5. 秘境、その芸術表現

TUAD mixing¹³では2013年に「秘境、その芸術表現」展を深井聡一郎氏とゼミ学生達との展覧会を開催した。「秘境」をテーマに、写真家・民俗学者である内藤正敏氏や山伏・アーティストの坂本大三郎氏など様々なゲストを招き勉強会を行った。フィールドワークでは教員・学生達と出羽三山⁴で修行をし、その体験を元に作品制作を行った。山に入り込み自然と肉体が一体化していくことで様々な感覚が研ぎ澄まされる体験は、日常に囚われている自分にとって大変貴重なものだった。科学や情報社会では気付けない神秘的な領域がまだまだ東北には沢山存在していることを知り、自身の制作イメージの飛躍を謀ることができた。

現実が人間の想像を超えた2011年、故郷双葉町の意味も変質してしまい、文明と自然の掛け合わせとしての絵画世界一近くにあってもはるかな、求めるとかえって遠ざかるような理想郷(特異なもの)と現実の境界そのものが揺らぐことになった。東北の具体的なイメージを拠り所としながら、自然界の成り立ちを肯定しつつ、心の奥底にも存在する新たな未知の場所を引き寄せようとした。

その中のイメージのひとつとして、仏像保存修復に携

わった岡田靖氏と宮本晶朗氏の協力により、山形出羽三山信仰の「御沢仏」をテーマに取り入れた絵画制作[図4]を行った。湯殿山参詣の奥の院への沢登りの際に見ることが出来る特徴的な岩や洞窟などを信仰対象とし、それらを彫刻化したもので、群像全体が湯殿山自体を示し、湯殿山まで参詣にいくことができない女性や老人などの信仰対象だった。白鷹町にある塩田行屋の本堂にずっとほこりをかぶったまましばらく安置されていたその仏像の群は、集落の湯殿山信仰において重要な意味を持つものだった。自身はその群像の魅力に取り憑かれ、そこにどこか東北らしさを感じ取り、絵画制作に至った。その後、文化財保存修復研究センターの協力により、2014年12月に山形市文翔館で御沢仏とのコラボレーション展示をすることとなった[図4]。



図4 「ヤマノカタチノモノガタリ」文翔館 山形市

6. 富士見町パークタワー プロジェクト

東京飯田橋のパークコート千代田富士見ザタワーのプロジェクトで、6050×2400mmの壁画制作を行った。飯田橋駅の近くで、神田川を界に、キリスト教会館や、神楽坂から日仏会館、江戸城の石垣、靖国神社や日本武道館や、富士見町の由来である富士山を奥に描いた。公共施設としてのポリティカルコレクトネスを配慮し、植物のモチーフをメインにすることで、場所の具体性を極力排除し抽象化して描いた。派手な金の表情を抑え、抽象化された桃源郷のイメージ作りに成功した。



図5 「TOUGEN -fujimi-」

7. St.Regis プロジェクト

2009年、アートフロントギャラリーからの依頼でSt.Regis大阪のバーカウンター壁画を描いた。

テーマは「桃山」「合戦」。大阪夏の陣、冬の陣などの合戦の図と、淀川の交易が盛んだった水都としての大阪のイメージ、桃山時代の大阪城や繁華街の鳥瞰図を描いた。普段描いているハイブリッドのモチーフは極力抑え、竜や鳳凰、風神雷神などの日本的モチーフを配置し、白亜地に金属箔と油彩で描いた。日本の文化や歴史性と、中国の桃源郷のイメージを融合した作品となった。



図6 「TOUGEN - St.Regis Osaka -」

8. 梅田蔦屋 プロジェクト

2016年、梅田駅LUCUA 1100の8階に出来た蔦屋書店ラウンジの壁画を描いた。大阪梅田を中心に据え、西の奥に神戸、東に京都を配置し、昔の初代通天閣や道頓堀の下町風情、大阪名物を画面下に沢山配置した。

山形と北前船で交易をし、文化の源流として東北と関西のコラボレーションを図りたいと思い、御沢仏などの東北山形のモチーフも掛け合わされている。



図7 「TOUGEN - Umeda -」

9. ORIENTAL HOTEL プロジェクト

2013年、オリエンタルホテル神戸のロビー壁画を描いた。兵庫県神戸市の旧居留地にあるホテルで、初代は1870年(明治3年)に開業した日本最古級の西洋式ホテルであった。その古き良き風情を再現し、六甲山を背に、港の様子や、神戸タワー、異人館など、交易で栄えた異国情緒溢れる街の様子、南蛮渡来のランプや銅像などのモチーフを神戸の街並みに散りばめ描いた。



図7 「TOUGEN -kobe-」

10. 東京ガーデンテラス プロジェクト

2016年、東京ガーデンテラス紀尾井町パークタワーの2階に3000×8000mmのpdc(ピーディーシー株式会社)による8kデジタルサイネージが設置され、「紀尾井町絵巻 紀尾井町庭内庭外図」のアニメーションが常時放映されている。屏風絵を自身が担当し、京友禅染匠の吉川博也氏(京友禅)と、能楽囃子大倉流大鼓の大倉正之助氏(音)とのコラボレーションとなった。屏風絵は赤坂御門を手前に配し、紀州家、尾州家、井伊家と呼ばれた紀州徳川・紀尾井家の屋敷跡や、江戸城、赤坂プリンスホテル、ニューオータニなどを配置し、山王神社のお祭りや芸能の様子を描いた。京友禅の八重桜や牡丹、桐の花の刺繍などを画面にコラージュし、絞り染めの生地を江戸城の石垣にあしらうなど、絢爛豪華な作品に仕上がった。山形・東京・京都の様々なものが融合された異形の生き物となり、不思議な動きを堀内隆氏(グラフィニカ)が生物や昆虫などの動きを参考に、アニメーション制作を行った。



図8 「紀尾井町絵巻 紀尾井町庭内庭外図」

11. 双葉町役場 絵画寄贈

20年前、福島県双葉町のだるま祭りをモチーフにした絵を双葉町役場に寄贈してロビーに展示してもらっていた。震災後、原発で立入禁止区域になり役場はいわきに移転したが、絵はそこでも大事に飾ってもらっている。2016年に双葉町や福島、東北の震災復興を祈り、離れ離れになっている方々がまたいつの日かふるさとに帰れることを夢みて、故郷へ恩返し of 想いを絵に描いた。

国指定史跡「清戸迫横穴」にある装飾横穴朱色壁画、安産祈願で有名な十一面観音坐像、1200年以上の樹齢を誇る「前田の大杉」、海水浴場としてにぎわった郡山海岸など町の名所・旧跡などを散りばめ、絵画制作を通して改めて双葉町の歴史文化の奥深さを再確認することとなった。



図9 「TOUGEN -Furusato Futabamachi-」

12. 最後に

「東北」の風景は、世界中のどこかと類似している。それらは風土や人間の気質、喜びや痛み、懐かしさを偶然にも共有してくれるものである。言語や文化、時代を超えたところでの多様な表現。それは刹那的な目新しさや斬新さではないが、じわじわとより深く心に感じる事ができる。

東北福島出身の自分の作品が、関西、香港、ニューヨークなど、遠く離れた異国の文化と響きあうのは「東北」の持つ、懐の広さ、ある壮大な神秘性に共感を覚えるからなのかもしれない。自分はいこれらの経験から、東北・山形で自然

や文化に影響をうけながら「世界の風景=TOUGEN」を描くことが可能なのだということを実感した。

トマス・モアのユートピア思想は、理想的な社会を実現しようとする、現代人が頭に思い描く「理想郷」とは異なる管理された社会であり、現実への批判が含まれている。それに対し陶淵明の掲げた「桃源郷」は日常と心の中との関係性を述べている。理想社会の実現ではない、目的をもって到達できない心の中に存在する地を夢想している。

現代社会における人間の理想は、宇宙・遺伝子・医療・科学や、電脳世界へと転化されている。その様々な理想の追求は、人間の心を内に閉ざし、更なる漠然とした「不安」で包み込んでいく。東北の地・山形に移り住み、この理想的な山や自然に抱かれながら人間・動物・植物のことを考え、関わり、みつめることで、自分がまた何物かに生まれ変わり、絵を描く必然性が視えてくる。

自然や人間がその土地で生き、様々なものを見つめ、表現するものは、これからも普遍的な芸術を生み出すリアリズムであると確信している。東北を想い、世界を旅する日々はこれからも続いていく。

註

1. 一定の場所に存在するために制作された美術作品および経過のことをさす。一般に、美術作品を設計し制作する間、制作者は場所を考慮する。
2. 山形県最上郡大蔵村肘折温泉の灯籠絵の展示会。
3. 東北芸術工科大学美術館大学センターの企画展。2009年度よりTUAD mixing!と題し、ふたりのアーティストを組み合わせ、展覧会やトークイベントを主催してきた。
4. 山形県村山地方・庄内地方に広がる月山・羽黒山・湯殿山の総称。修験道を中心とした山岳信仰の場として現在も多くの修験者、参拝者を集めている。

参考文献

トマス・モア ユートピア 岩波文庫 1994
相転移Phase Transition KUGURU 作品コメントより